



最新情報は、ココからチェック!!

2人で試合に出たい!!
思いが叶いビーチバレーで全国の舞台へ



衛生看護科3年
井上 涼夏さん
赤木名中学校出身

家政科2年
伊元 優姫さん
田橋中学校出身

女子バレーボール部が昨年に引き続きビーチバレーの大会に出場。出場する26チームの頂点に輝き、見事優勝!!九州大会、全国大会への切符を手に入れました。

部員不足で思うような活動ができない中、活路を見出したビーチバレーの世界。与えられた環境で生まれた選択肢のビーチバレー。2人で過ごす時間の長さがここぞというときに本領を発揮し勝利を手繰りよせました。2人の絆で九州大会、全国大会の舞台での活躍を期待しています!!奄美大島から全国へ!!

九州・全国大会のスケジュール

【九州大会】令和4年7月23日～24日 第8回全九州ビーチバレーボールジュニア選手権(岩崎杯)大会(大分県大分市)
【全国大会】令和4年8月11日～14日 '22マドンナカップin伊予市ビーチバレージャパン女子ジュニア選手権大会(愛媛県伊予市)

機械電気科の
熱盛
アツモリ

工業技術
研究部

6月11日に行われた「第21回 高校生ものづくりコンテスト鹿児島県大会において、奄美高校 機械電気科の「田畑 昂さん」と「持永彩星さん」がそれぞれの部門で『鹿児島県No.1』となる「最優秀賞」を獲得!!九州大会の出場を勝ち取りました。奄美高校から2つの部門で最優秀賞を獲得できたことは「あまこう」にとってもビッグニュースとなりました!!

ものづくりコンテストとは

産業を支える技術、技能水準の向上を図るとともに若年技術・技能労働者の確保し、育成を目指し、県下工業高校性のレベルアップと技術、技能尊重の社会的機運の情勢を図ることが目的。

旋盤作業部門、電気工事部門、電子回路組立部門科学分析部門、木材加工部門、測量部門、家具・工芸部門、自動車整備部門、溶接作業部門、9つの部門がある。

溶接作業部門とは

30分の制限時間内に、厚さ9mmの鉄板2枚を突き合わせて溶接作業を行う。溶接した部分の外観と溶接部分を曲げて割れの発生の有無で技術を競う。

電子回路組立部門とは

2時間30分の制限時間内に、電子回路の設計と制御プログラムを作成し、目的の動作をするシステムを完成させる。はんだ付けの技術とプログラミング力が問われる。



溶接作業部門
優秀賞

一生懸命ひたむきに努力する姿を校内でよく見かける。高校生活を過ごす中で「何かスイッチが入る瞬間があった」と話す田畑さん。そのきっかけから勉強が楽しくなり、溶接の技術習得以外にも多くの資格を取得してきた。

日々の小さな積み重ねで掴み取った優秀賞。彼の取り組み姿勢を見ていると神様はいると確信できる。

今は、九州大会の対策と目標とする大学進学を実現するための勉強に余念がない。

機械電気科3年
田畑 昂さん
名瀬中学校出身

九州大会出場



電子回路組立部門
最優秀賞

あまり人と話すことは得意ではないというが、それは謙遜しているとは思えない。自らをしっかりとし、分析し、自分の言葉で明確に目標を話す姿が印象に強く残る。

県大会は、自分の持っている力が存分に発揮でき、その結果として「最優秀賞」が掴み取れたと満足する結果だったと振り返る。

今は、自分の最大パフォーマンスがどうやったら発揮できるかを念頭に、何をすべきかを考えながら対策に励んでいるという。

レベルが格段に上がる九州大会で、今の自分の実力がどれだけ通用するか試したい意気込み。

機械電気科2年
持永 彩星さん
大川中学校出身

九州大会出場

宝物は足元に。
僕にとっての“宝物”は「島唄」でした。

VOICE

前山 真吾さん

2001年 情報処理科 卒業



PROFILE

浦上町出身。高校時代は級友とロックバンドを組み自分たちでチケットを販売してライブ活動を行うなど「島唄」とは無縁の高校生活を送っていた。むしろ島唄は「嫌い」な音楽だった。当時はミュージシャンへの憧れを心のどこかに燻して過ごす日々。諦めきれない夢にどうにか食らいつつあった。

奄美高校卒業後は、奄美看護福祉専門学校へ進学。ふと訪れた加計呂麻島で自らの人生を大きく動かす出逢いに遭遇。

現在は、介護老人保健施設でケアマネージャーとして働く傍ら「島唄」を世界に広げる活動を行っている。6月19日に行われた初のワンマンツアー「AMAMISM」は大盛況のうちに幕を閉じた。

後輩たちへ

「いつ、どこに」「きっかけ」「チャンス」があるかわからない。そのいつかわからない『出逢い』に気づくために、毎日、自分ができることに一生懸命であること。やらなかった後悔より、やって後悔。自分としっかりと向き合っていれば必ずチャンスは来る。その瞬間に「心と身体」がしっかりと反応できるように、毎日を過ごしていただきたい」とメッセージをいただいた。



島唄との出逢いは突然に

島唄との出逢いはあまりにも突然だった。

夏祭りのボランティアで訪れた加計呂麻島で名も知らぬ唄者の方が歌い始めた島唄に心打たれた。その島唄が耳に入ってきた瞬間に身震いし、準備の整うはずのない心と身体の器は、その時の感情を処理できなかった。ふと気がつけば、朝の支度、車の移動中、就寝前まで、暇さえあれば島唄を口ずさみ三線を弾き、師と仰ぐ「石原久子」さんの島唄が収録されたカセットテープを擦り切れるまで聴き込み、島唄教室に通い始めている自分自身の姿があったという。

島唄との出逢いが「心」を育ててくれた

加計呂麻島で島唄に出会うまでの「島唄」へのイメージは「ダサイ」「カッコわるい」「年寄りの音楽」など、良いイメージはなかった。しかし、生の島唄を聴いてから、そのイメージは跡形もなく消え去った。島唄に対しての尊敬の念も芽生えた。島唄に触れてこなかった自分を恥ずかしくも思い、もっと幼いときから島唄に触れていればとも思った。

島唄にのめり込み始めたタイミングは、「元ちとせ」さんの「ワダツミの木」が世間を賑わしている時だった。これは良くも悪くも前山さんの「心」を揺れ動かした。高校時代は島唄とは対極ともいえるのロックバンドで青春を謳歌していた。島唄との出逢いを知らない人たちからは、「流行りに乗った」「あいつが島唄を」などと思われ捉えられ方してしまい、悔しい思いをした。一方で、就職活動で訪れた東京池袋で敢行したストリートライブでは名も無き唄者の島唄でさえも、多くの人の足が止め、聴き入る姿を目の当たりにし、自分が加計呂麻島で島唄に出会った時のように、「島唄には説明のいらぬ『人の心を動かす』魔法の力』があることを改めて実感できたという。

今では島唄と出逢うタイミングに狂いはなかったと思うが、当時は島唄に対する「自分」の在り方に自問自答する日々が続いたという。

人生の選択 拠点は「奄美」か「それ以外」か

20歳の進路選択は、「葛藤」の連続だった。東京で歌手として生きていくという選択は常に頭の中にありながらも島唄への想いは募るばかり。世間一般に島を出ることが「当たり前」の中、人生の選択には時間を要した。「島を出るタイミングは“今”しかない」「島唄は“島”で学んだほうがいい」どちらも譲れない選択だった。悩み悩んだ末の答えは「島」で生きていくこと。「島唄への情熱を燃やし続けるには島に残ること」島唄への想いが人生の選択を決心させた。

「島唄」を「若人へ」「未来へ」「世界へ」

現在は、「自分の『心』を育ててくれた島唄」「島の文化の象徴である島唄」を若い世代へ繋いでいく活動を精力的に行っている。